弘法大師行狀記

一

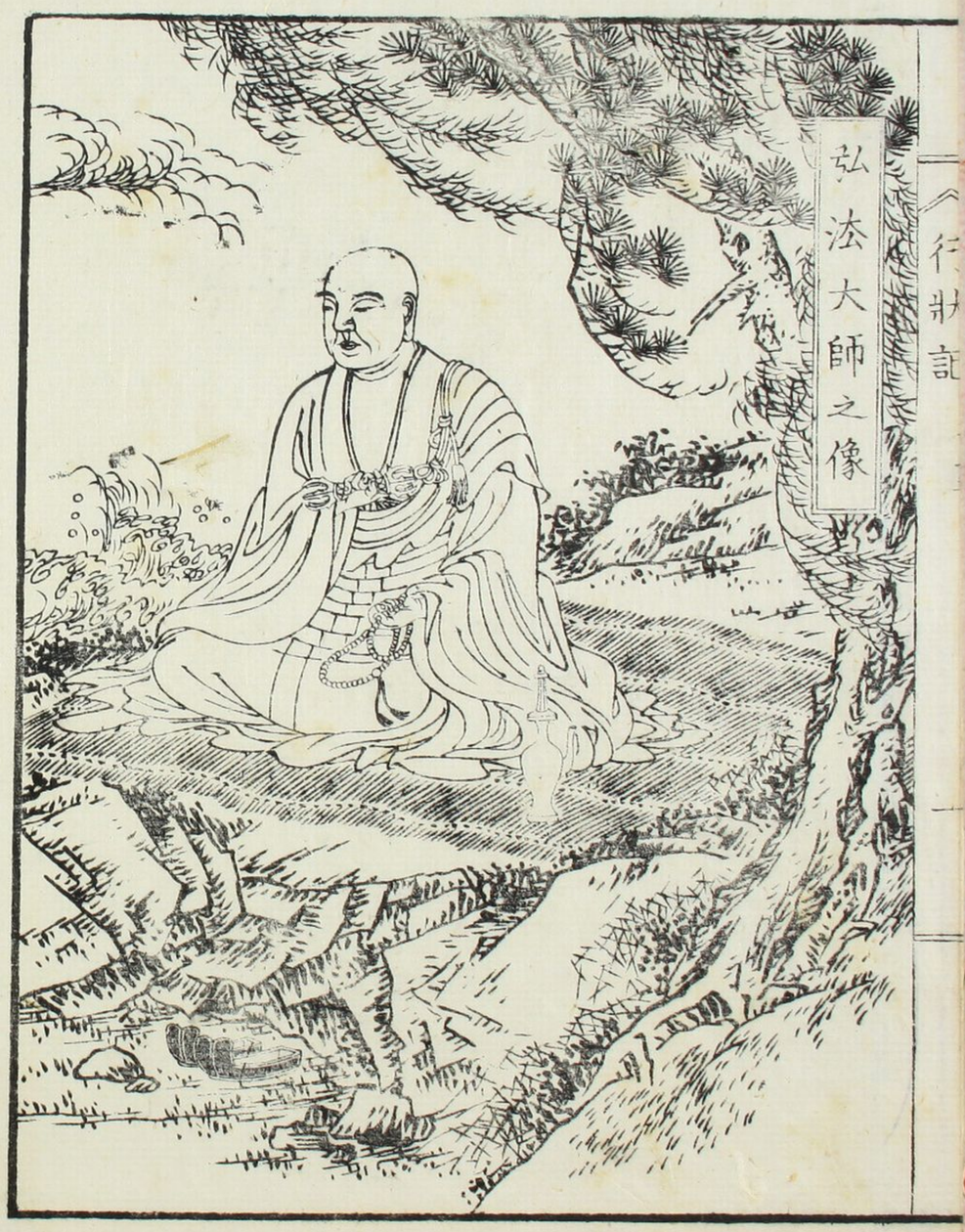
寶暦八年戊寅冬刊行

弘法大師行狀記 六冊

京都

大曜文庫

行狀記
口畫
三丁
松川半山筆


弘法大師之像
行狀記

護法神

守敏僧都之像

三堂寺僧玖賀之像
宇賀鬼と明神の像

附言

一此書は初書まつを原本に従ひ乃ちこれを改めず
一原本に表題字に仮名をつけることなしいへども今童蒙に
たよりせんがために加ふ
一画は原本のまゝ古意を失はざる縮にこゝ遊を圖るのみ
一原本は国より巻軸にわれば画は一版にこの冊にまとめ
いへども今仮に遊ゝ巻を帙
一巻は始に附する所の摸影は原本中古東寺観智院
賢愛僧正の筆なるを以て仮にこれを模写せしめ彼僧正
の遺ふまこの数で画乃版毎ふこまをとり写に李

天保四年癸巳十一月上澣

東寺　沙門一音謹識

夫我　大師は法位を天下に住北の人
なりしに不那きばはふいふ屋をあつめ
岩は形状を能はの世に数あるを
いへども書画ふくびすをれる数を唯東
寺愛蔵の画巻物のみ遊で他者を
何人といふ婦をを伝へで思ふり中古は

縉紳乃低ふ[illegible]の年を　叡王云々

のゝ[illegible]ふ出なし高亜を土佐光孫の一筆

[illegible]すゝて貞和中の物ふ[illegible]

をきゝ[illegible]て奉[illegible]

[illegible]ふ[illegible]を縮写しその[illegible]

[illegible]持る溝深[illegible]の徒ふ[illegible]

聖人入懐霊脂有因遍

照垂跡慈齋洪鈞

急昇兜率溝侍慈尊雲

皆祐罰萬代長存

吾藏籍中有　弘法大師行狀縉詞者十二卷十輪院

住持一奇嘗請欲縮寫上木流布人間蓋將述一代行

化之懐抱萬人御慕之意也近在江戸遍募緇素癸巳

之冬刻遂成需余題一言余謝四千年懐慈邑遍廟堂

墻宇傾頹未倏殆不能蔽風日何以紙張法筵乎夫無遮
經營必報恩也皇獨伏法涌究而已哉於是奮拙鼓頭
將以期年之間一新之風挽焦心於世間三昧不得綴文
寫字是余之所以辭也一言の懇請不已乃使田主と聚
高祖真蹟中之字錄余舊作二頌以塞其責云

癸巳仲冬於大寺學頭沙門兼寶沐手謹志

平安 樋口與兵衛刻

右不藝の拙乃ち筆者田孫を求めて一二の
さてこれを田孫に
後花明院名ゑ給ひて　大師と帝崇仰ふかく
おくまくの狀記を　聖覽あり
感感あさのくるの事情を　加へ給ひ
内外の第まを新まくれ尚も青蓮院の
を筆者に應准后の由緒も於ては於
名を授田孫とあるに第一のんと
仰せ田名を法寶院あるはの歴世
帝王授御崇信とくに結述一編あるの

[illegible]朱子の經藝好ませの人[illegible]

[illegible]

帝は宸翰を造らせ給ひ新書薩埵の博換も

宮人[illegible]

[illegible]

[illegible]

密教[illegible]

[illegible]

[illegible]

一音誌

弘法大師行狀記標題

第一

誕生靈瑞　童稚奇異　四王侍衛　俗典鑽仰

出家學法

第二

登壇受戒　聞持修行　室戸伏龍　金剛定額

老嫗授鉢　虛空書寫　釋迦湧現　久米感經

第三

渡海入唐　大使替書　長安奏聞　存問勅使

青龍受法

第四
珍賀懺謝　修圓護法　圖像寫經　惠果附屬
石碑建立　多生誓約　宮中壁字　流水點字
梵僧授經

第五
三鈷投所　歸朝奏表　瀝水生樹　久米講經
大内書額　清涼宗論

第六
東大寺蜂　高雄練行　傳教灌頂　圓堂鎮壇
濁水手水

第七
南山表請　明神衛護　高野結界　堂塔草創
心經講讃

第八
東寺勅給　八幡鎮座　稲荷來影　神泉祈雨

第九
講堂起立　舍利灌浴　室生修練

第十
正月修法　門人遺誡　眞影圖畫　南山入定

第十一

東寺灌頂　官位追贈　大師諡號　博陸叅詣

第十二

仙院臨幸

通計五十九箇條

寶暦七年歳次丁丑臘月十一日馳筆了

僧正賢賀　俗齒七十四

法夏六十五

弘法大師行狀記卷之一

夫天地開闢はじまりて人民ゝ道ありて佛法相つたはりて
国果のこゝろをうけ仁しをゝ應化乃如来誕を秋津洲
ゝ法界ゝ大士光誕日域の塵ゝ和らぎ給き或ハ
宗廟社稷の神祇をして子苗誕續て第姓を安定し或ハ
有知有徳乃法流をつく貝業を傳へて四生誕生すけ
給ハ外ゝ恵澤をゝどもゝ内ゝ道眼をひらく皇家
のゝ[illegible]ゝ法ゝ流是ゝ為ゝ[illegible]
ゝの[illegible]ゝ儒教道教の操行を制度する虚幻ゝて

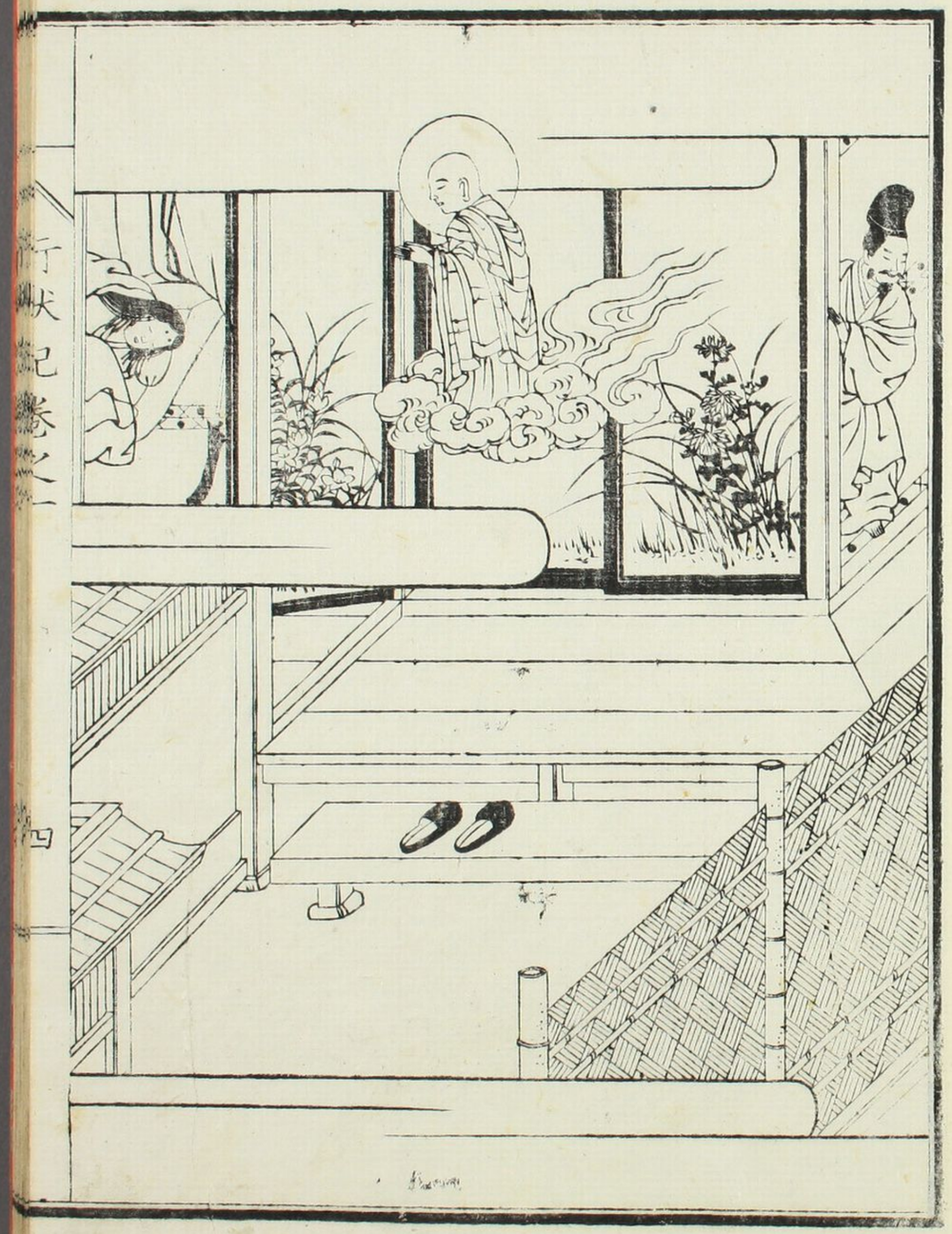
真実ふかくして小乘大乘の心性を研覈する因分ふかく果海を尋ぬつ遮那表徳の実義を演じて法佛内証の極理をのぶる事をもちゐる秘密真言の一宗ふあり是則人の膏肓法の肝腑也

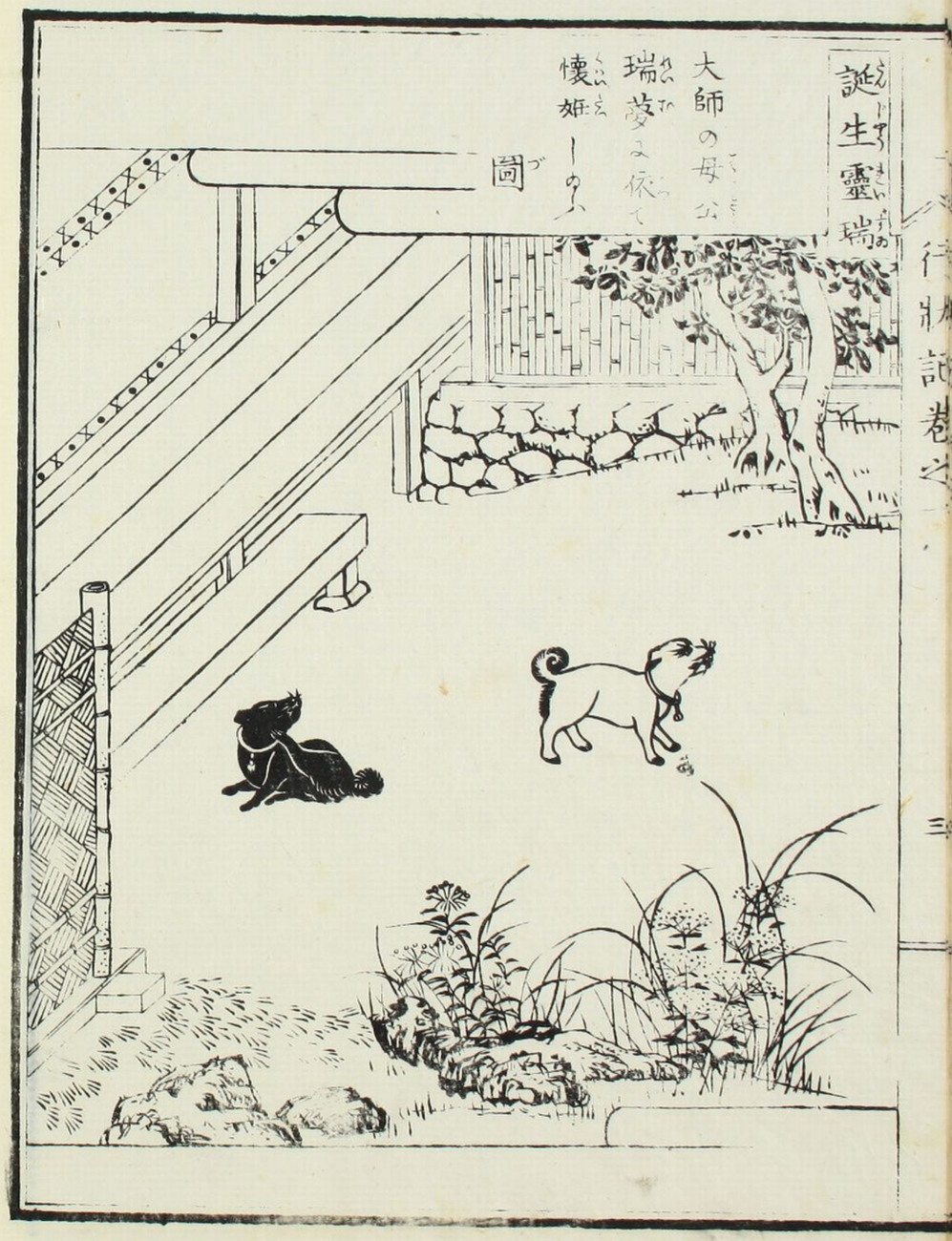
たゝふ大聖ますます仏法大師と名付奉る也　この方本地を祇して海を邊域ふまき給へり降誕乃靈瑞童稚ゟ徴祥奇特多く希異極まるゝ受業の後進具の習学多く内外ゟ典籍ゟ俗の奥旨をきわむ　本朝ふ渡りてひろく真俗の異域ふ留学して海をわたる　初とゆうふ

孫ぶ人法ひふする所ゟ大日如来第七代の付法京師青龍寺恵果和尚ふ逢奉りて安祥の勇茶をつゝへ諸尊の瑜伽をゝひ経論を究の負し道具を齎ゝして帝城東寺ゟ靈樞ふをさめられ　皇圖法護の秘寶をすゝ恵慈父を頂上宮経を講説しまのうゝ佛法　我朝ふ伝り聖人此境ふ出といへども秘教を宣揚して迷徒を汲引する事今正ふ新まるり遺流なゝを法をうけて朝野をゝひを得ざるをすゝ経ふ全身を南洞ふ学て遥ふ鶏園の月を待恵眼を上天ふめぐらして遺跡の塵をうゝ

ゞ見給ふを一々の行狀まことふ權化の跡垂しといへ
ども世たぐひ有難き事ども多く傳記まの落て
諸家よりて所々の聖跡ありといへども機緣ある人を
周覽志ばしものうき辱を魯鈍愚去まゞくき輩を魯鈍
まどひやすし　故ふ後素のあさけなざふよりて前修の
ふる跡徒試顯をまひ稱ゞいく八披覽の賢士朝嘲誠いと
さず掘教の庸生疑殆をまるして入定留身ふ
言志をうむゞを誓願捨命の報酬といとまべし
抑本朝真言の言祖贈大僧正　勅諡弘法大師八讃岐
ふ生多度郡屏風浦の人なり嚴親八佐伯直氏

みるりし天亂より流を遐方ふ及べり
景行天皇ふ御子稲脊入彦命のまゞ阿良都別命
の男豊城と云し人　孝德天皇ふ御時ちゞめて
佐伯姓を賜まり其祖日本武尊ふ隨ふく東夷誠
ふづ多し功勲世ふ於ふふりて讃岐乃國ふ
地を班ち賜き此不ふ家居して亂業和續て子孫
絲令こり言堂八阿刀氏の人なり　爰ふ天竺ふ
ふり聖人飛來りて懷ふ入と見て妊胎ひり
光仁天皇の御宇寶亀ふ年ふひのくりく十二乃
建辰とみち十指ふ月掌と合て幸酉日とりちて




誕生靈瑞
大師の母公
瑞夢に依て
懷妊しの
圖

其二

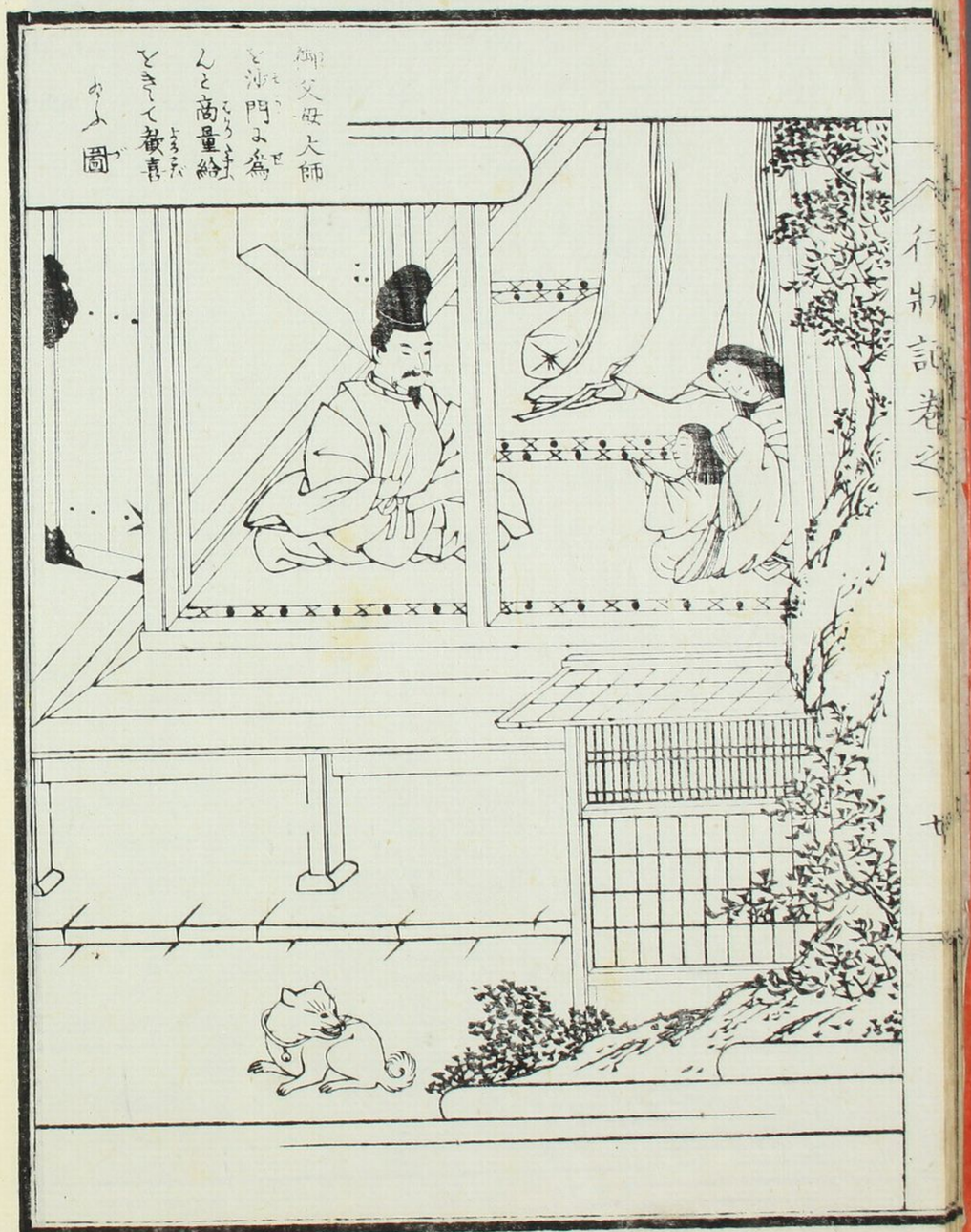
誕生ち瑞を示せり懷妊月のまをて佳期歳よみち
しうぶも恙常ふとくるし先ぎ出産事毎ぎ所う
なり彼聖德太子の母穴穂部皇子の
神龍ふ生れ降給しに奇異乃佳祥をうを感ぎ
覺結を
大師御年五六歳ぢ用義ふ常ふ八葉の蓮花のよま
坐して諸佛を物ぎうすと御覽ぎられをり志う
ぬをども父母ぬも未ぢ知ず況他人をや
爺孃をもとへふいうをしみ奉りをたれぎ御の玉をりて
ぬぎぶぎ志し御名をば多布度物とり奉る

十二歳の御時父母ぬ御身ふ申り我子ふ昔の佛貴子
なる為し義ふ天竺の聖人来りてふをを御ふ入を
見て妊胎せり志ぬぬの子ぢりもく佛家う
入を沙門をるして釋氏と續しむ為しと幼ふの
涉年ふ是ぢ聞給ふく源をう御ぬぶ御をぬぬの事
いとを第ぬぬを十歳なをを芥鶏ぬぬぬび竹馬乃
たをふをを為くして常ふ泥土をりもく佛像を作を
草木をりもて童堂をたをて内ふ十忌奉を法師
をる式車とし給ひ第
昔を公より御使を國くへ巡さを民庶の苦しみ

童稚奇異

大師五六歲の頃常に諸佛の答話をとゆめ[illegible]童遊すも仙躰を塑りて礼拜しぬ

圖



御父母大師を沙門より爲んと商量給ときて歡喜給ひ圖

ことゝ場給ひ給ひ其後ハ君ハ法ゑもて神ゝを民ハ食を持く命とし穀法をぬきバ國母ゝ法く民窮しぬまバ禮儀をおこりがゝし疲るゝ鞭を母ゝまぐるゝ如し王化ふゝ志ゝゝずゝ利潤法ゝ法して非法を行ゝ民ゝゝ行ゝ為ゝ悪ハ吏の咎ゝり吏ゝゝ不善ハ國を小ゝゝ君良吏を擇バゝして貪婪の輩をゝゝぬきバ暴虐を恣ふして百姓をゝゝ困しむ民の憂天ふ昇く災變をおゝ災變おゝゝバ國土亂るゝゝ上乃法しゝゝるゝゝ母ゝを下ゝゝ御ゝゝるゝゝ玉土ゝゝみゝゝゝバ君ゝゝ民乃

四王侍衛

勅使四天王の童子を侍衛をして礼拜する圖

慈を同じ更ぬ御屋まりをもなぐさむ為ふ御使
とはうかされ乍りさまバ　勅使と讃岐のゐんゝ
ゐり者ふ大師幼して諸の童子ふ交りて相撲
給ひ乍る試見事りてるとりあを禮拜して曰公ハ凡人
ふ非ずして是ハ四天王白傘をとりて前後ふ扶ける
ゞ人を定知ぬ事前生ふ聖人なりしふ違ふと試と
を後隣里の人驚て御屋しゝ御衣と神童と崇ゝ
者る今童稚の端とうもがるふ遥ふ神化の兆を顯
勢を経中ふ源位ふ蓮華利生の相を説て老ま
衆生ふ依止とゐりて輪王の徳を倣へ頂上ふ白蓋況

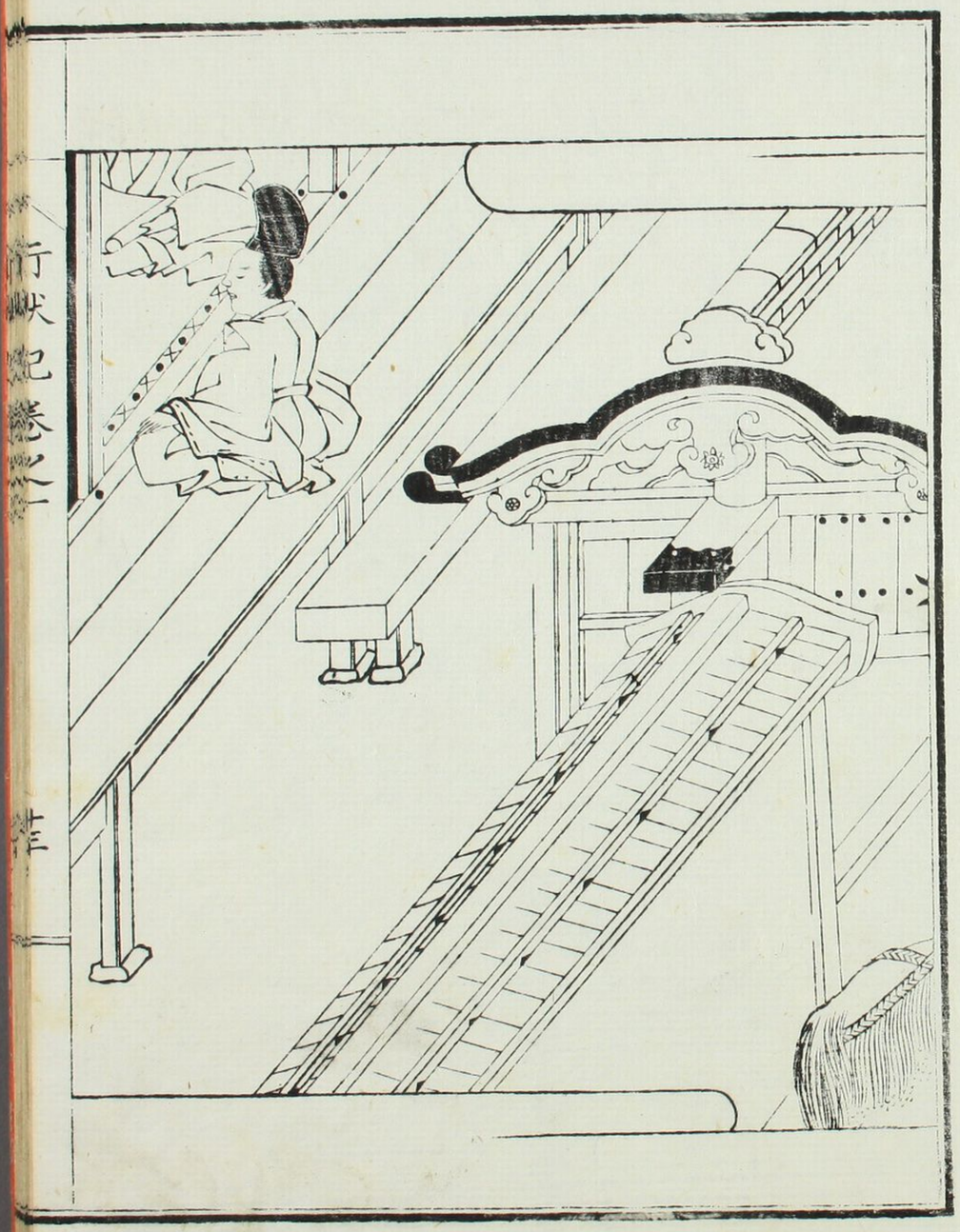
現ぜと異名なり是則曰元得智言くいうえん曰元量ん あまく孫く霞が志うしるゆへあり玉聖の感ずる而推く知ぬ屋れりよりや

大師天性明敏ふして上智の雅量洒落ふ給ふ顔回が十と知し古の孫士衡が多をうまへし昔のうえ先しまかく屋うぢ出ぶえ者るまふふ外戚乃叔父阿刀の大足大夫伊藤親王学士双親ふ相逢て曰佛弟子となさむとりハ志うじ大学ふ入く経史をまるび才伎立名をひのぶ志ひふ山へふまう坊て則男氏ふ法きて俗典を学び鎖帷をとぢまし給ふ

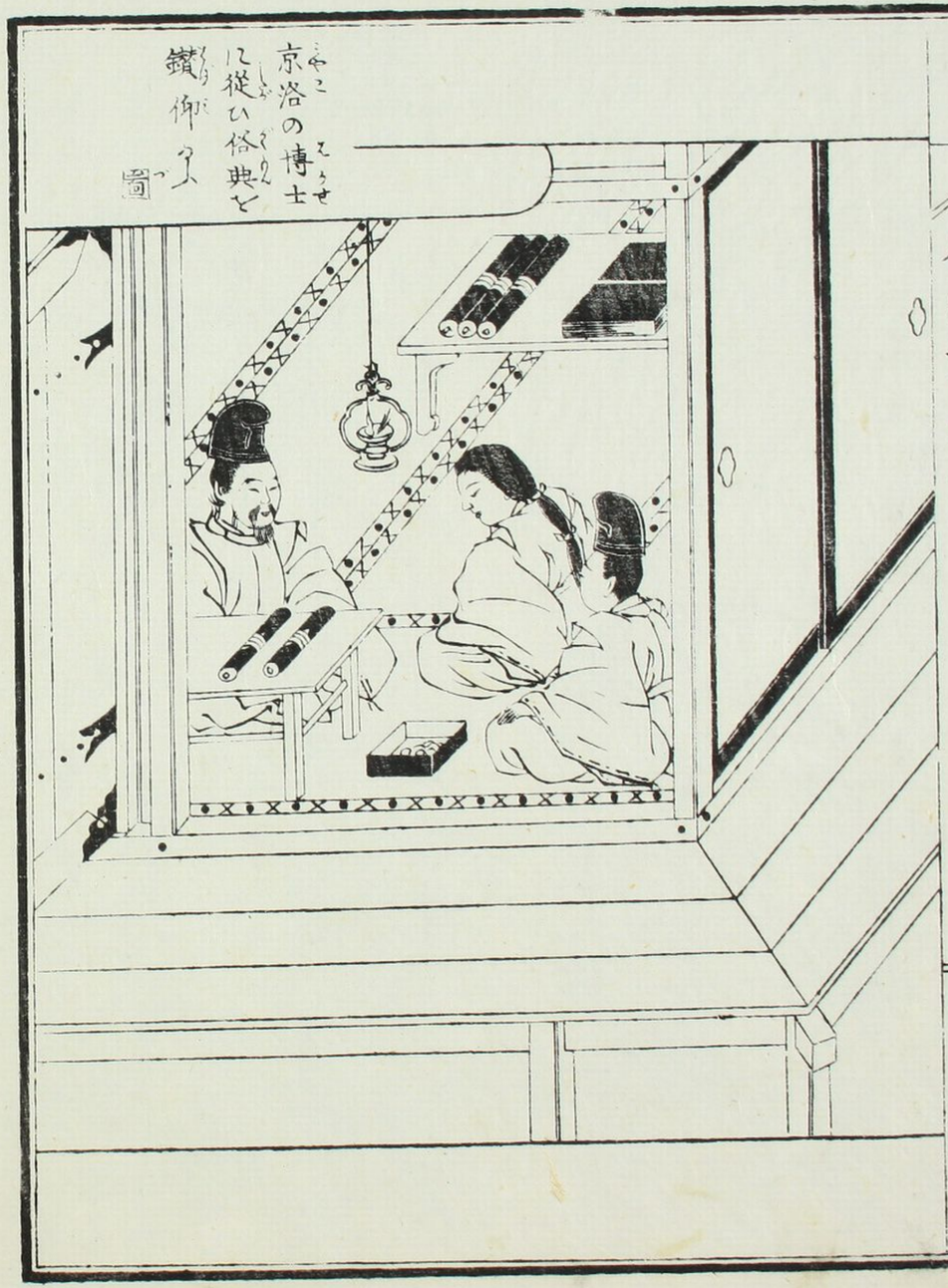
俗典鑽仰

御叔父阿刀氏ふ儒典を學習の圖

大師御歳
十五ヵ年
京洛へ上り
ゆく圖



其二

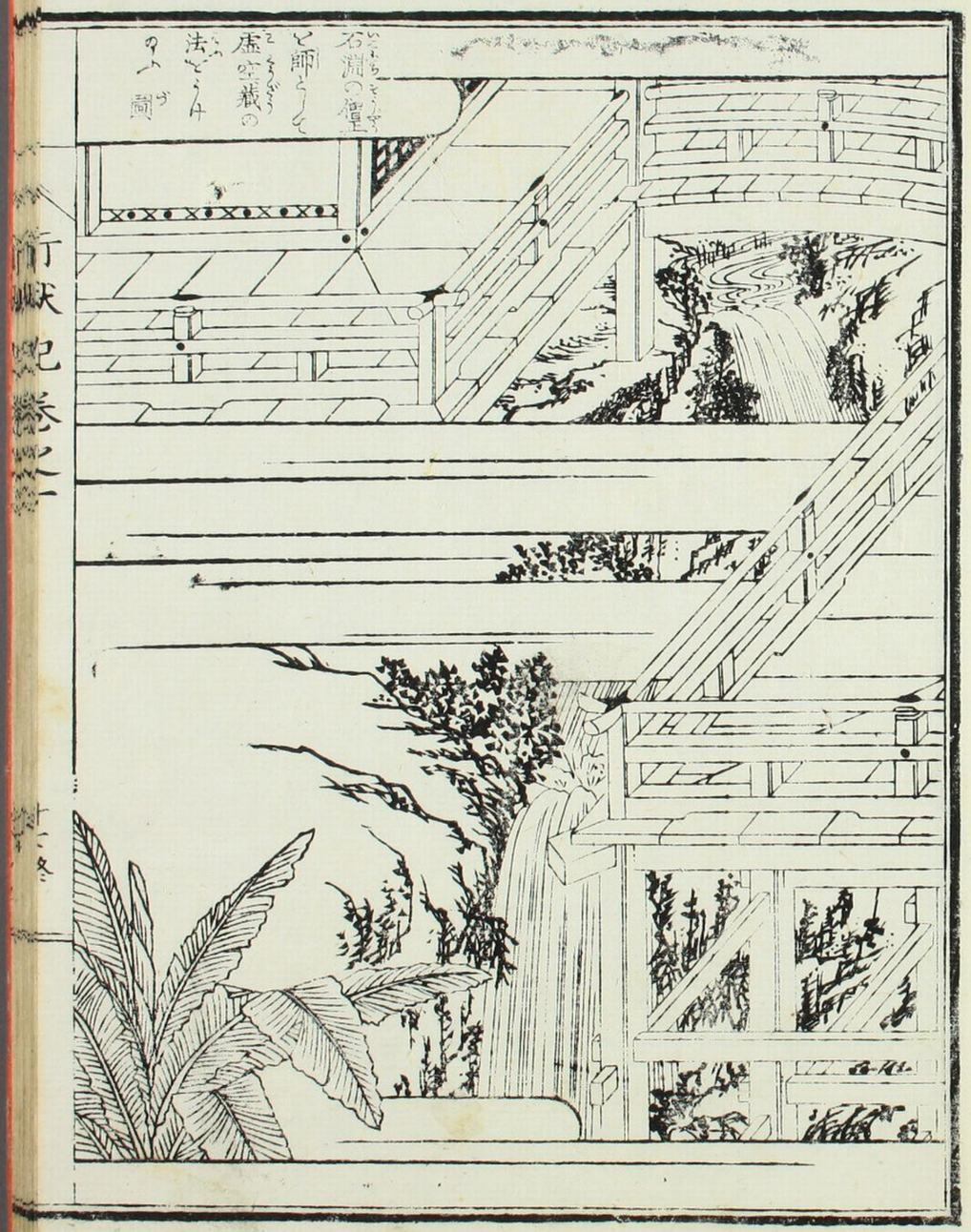


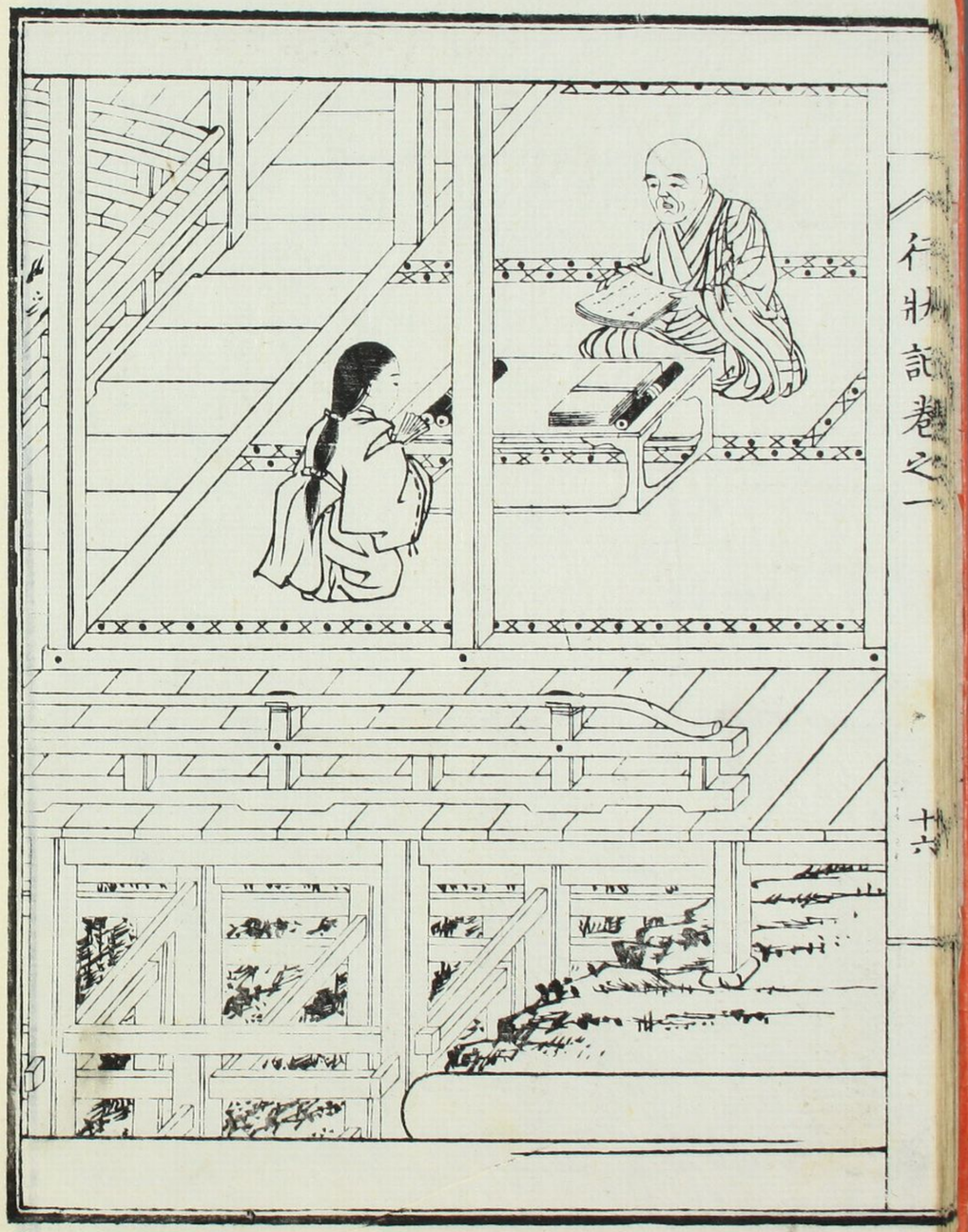
遂ふ延享七年御年十四にして家郎に拜して京洛
に入十八より御年槐市ふまゝ學業ふ給ひ
直講味酒淨成ふ毛詩左傳尚書に
より岡田より博士ふ達てのさ孫と氏春秋と
まなび
凡螢雪乃功を発奮し給ひ繩墨より
凡に給ひ学業もやく成て文質相備る
千歳より日月凡の中ふ明らふ一朝より錦繡筆乃
もしふあざ凡う彩り
御入洛の後石渕の賜源正勤掾に師とし

大虛空義なるべし小林滿虛空義なる法をうけ心府
小深く念持し給ふ此法をもひろめ大安寺道義
律師大唐ふるくり諸宗をまなびきわめ名元興
三義小運をうけてをり遊有をうけへ　本邦に渡り
来りて後同寺の若僧大徒ふさづを議公又勤操
和尚ふるくりを和尚此法の揚利を溝給て英傑ハ
なまれ世ふ溢まし　うべ大師うの面授をうふまて
深く授膺し給へり　ひのまバ儒林ふ拔く廣を絵
史をまなび給ひしうぜを考りハ佛教ハまなみく
のうちう避世の御心ざし深うまれ給うふ心ひ給へく

我なるふ所の上古の俗典ふハ眼前ふして一躰の後の
利弼色心風と色免て志うじまうこの徧田を作ひまたと
則近上ふるう場給て御命を元空とぞ法き給ひなる
延暦十六年臘月の初日三教指歸ハ撰しく
俗教の益ふ記事ハのべ給ふを詞ふ云名市の榮
花を念くふ見ていひ叢叢の烟霞を日夕り
ふまこハ孫ハ拙肥流水を見くハするハ電幻の
るがハ忽ふ毋をりまを雜驕弱をみくハ則因果乃
ひのうれ日まくふふひ国ふふまく我をもひ誰ろ
風をまるがも交ふ一事ふ親戚有り我をまぐるに

出家學法


石淵の僧正と師とうて虚空蔵の法どうみの図



不常の索を持てし我をとゝもるに忠孝ふ共むをと
いへとゝるを余ありはく物の心一ふ所のず莊洗性
こゝ有りこの所ふ聖者の人とうるに教網ふ三種所を
いたる釋奈孔ありふ法源へて有りといへどゝ無り
皆聖説ありを若をこの羅ふ入るば仏の我を孝ふもし
うもしと如く法たまへり仏書一部三卷伝者の写ふ製
菓せこまこうりのと八聲聲聞帰と題し給ひ仏
後ふ三教捨帰と改るを書世ふ作りて今ふ縮素の
ゆをの珍びを大きを
弘法大師行狀記卷之一終

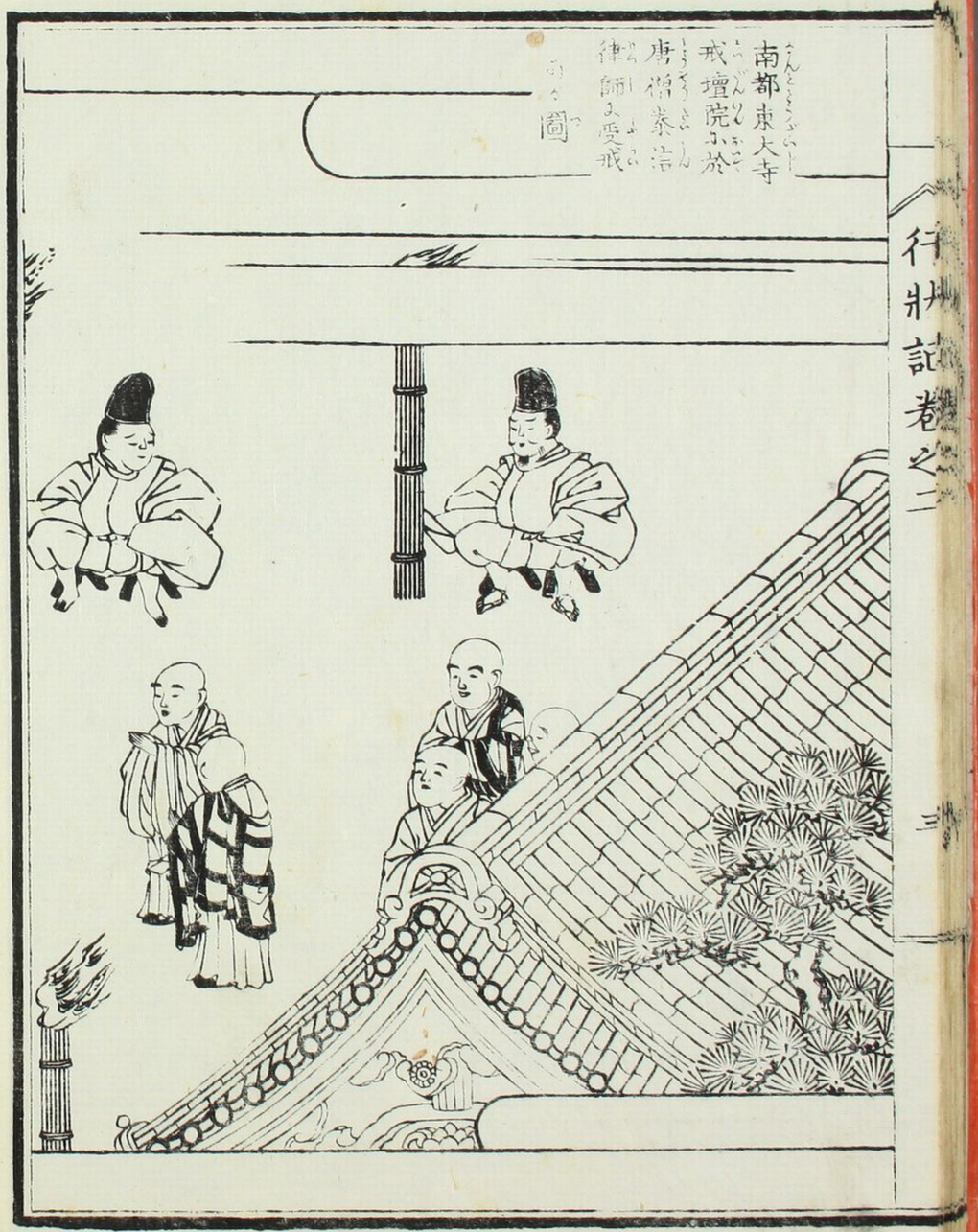
弘法大師行狀記卷之二

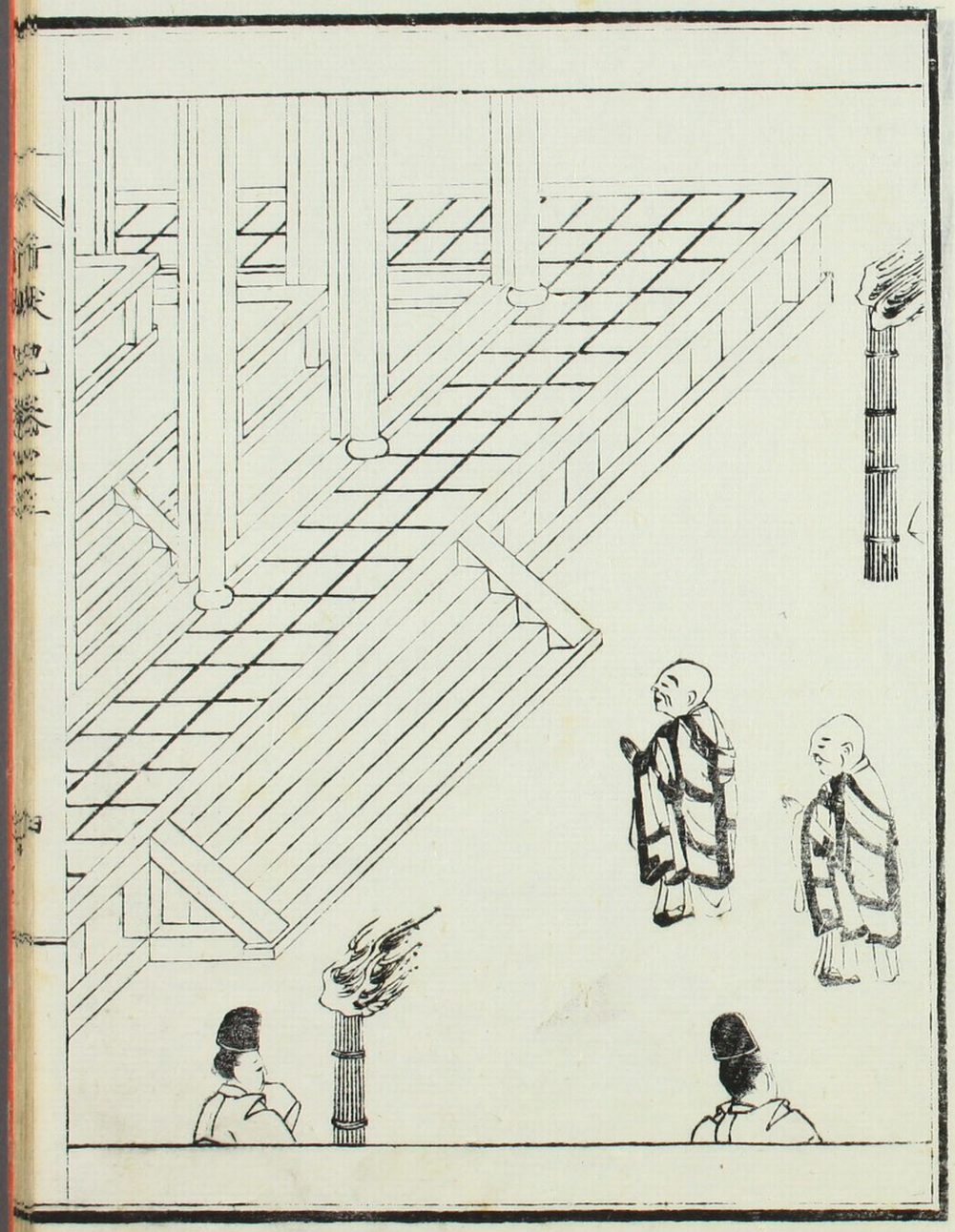
大師遂ふ雙門とのぶをいぐ山林仏渉覽して修練
歳月仏如をり給ひしが石渕乃賜伝正をの若仏
を知ちれを大師を招引し給ひく延暦十二年御歳
二十空中しを紀和泉ふ槙尾とふ寺ふして醍醐と
剃く法法の十戒七十二仏威儀と授をる御諱仏
教法と號しを人後ふ如空と稱せを
同十四年四月九日東大寺ふ戒壇院ふして唐伝
泰信律師仏逢して伝戒乃和尚をして法作豊安

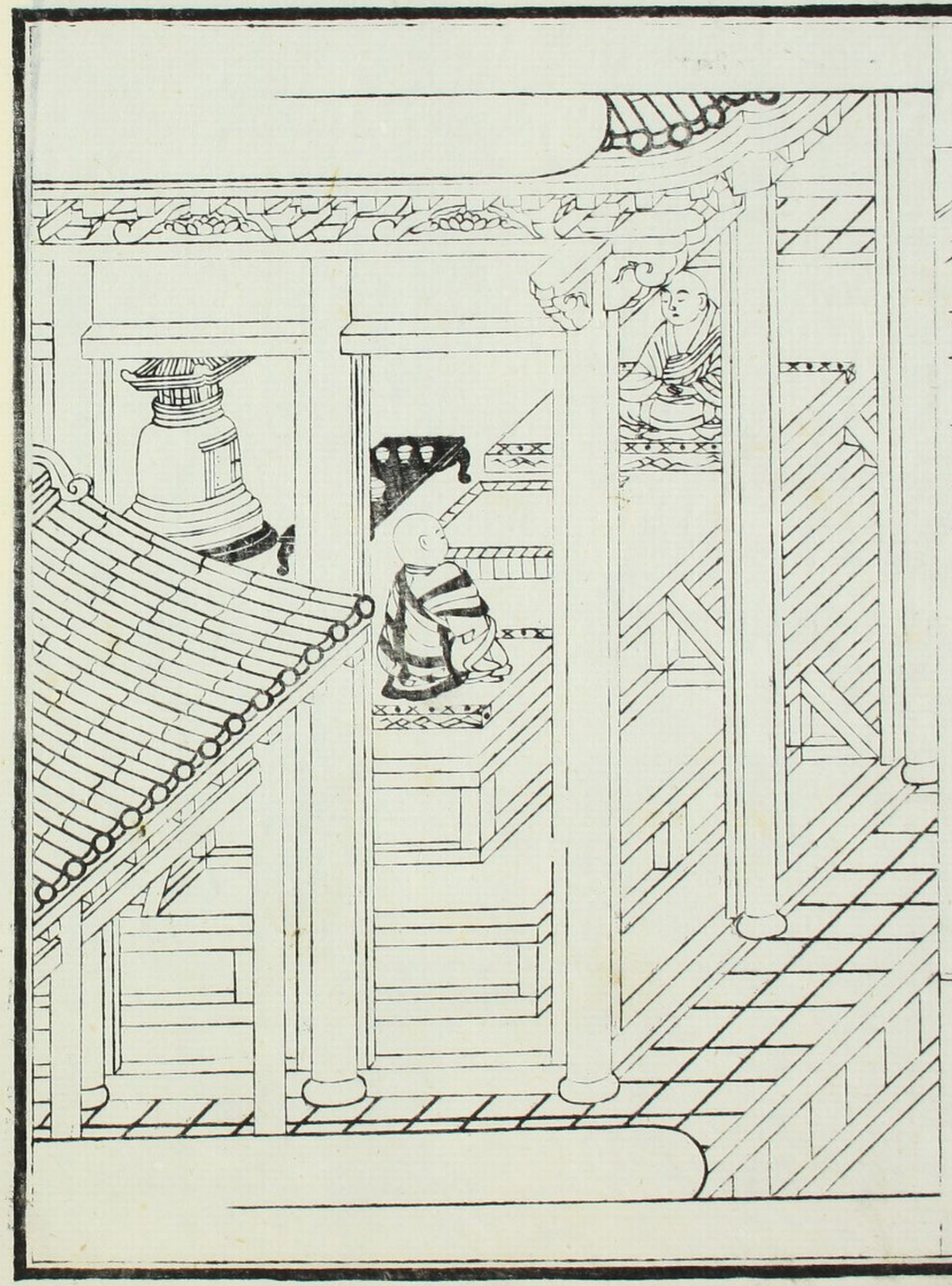
登壇受戒

和泉國槇尾寺ふく剃髪し
の圖

南都東大寺戒壇院ふ於唐僧泰信律師ム受戒の圖

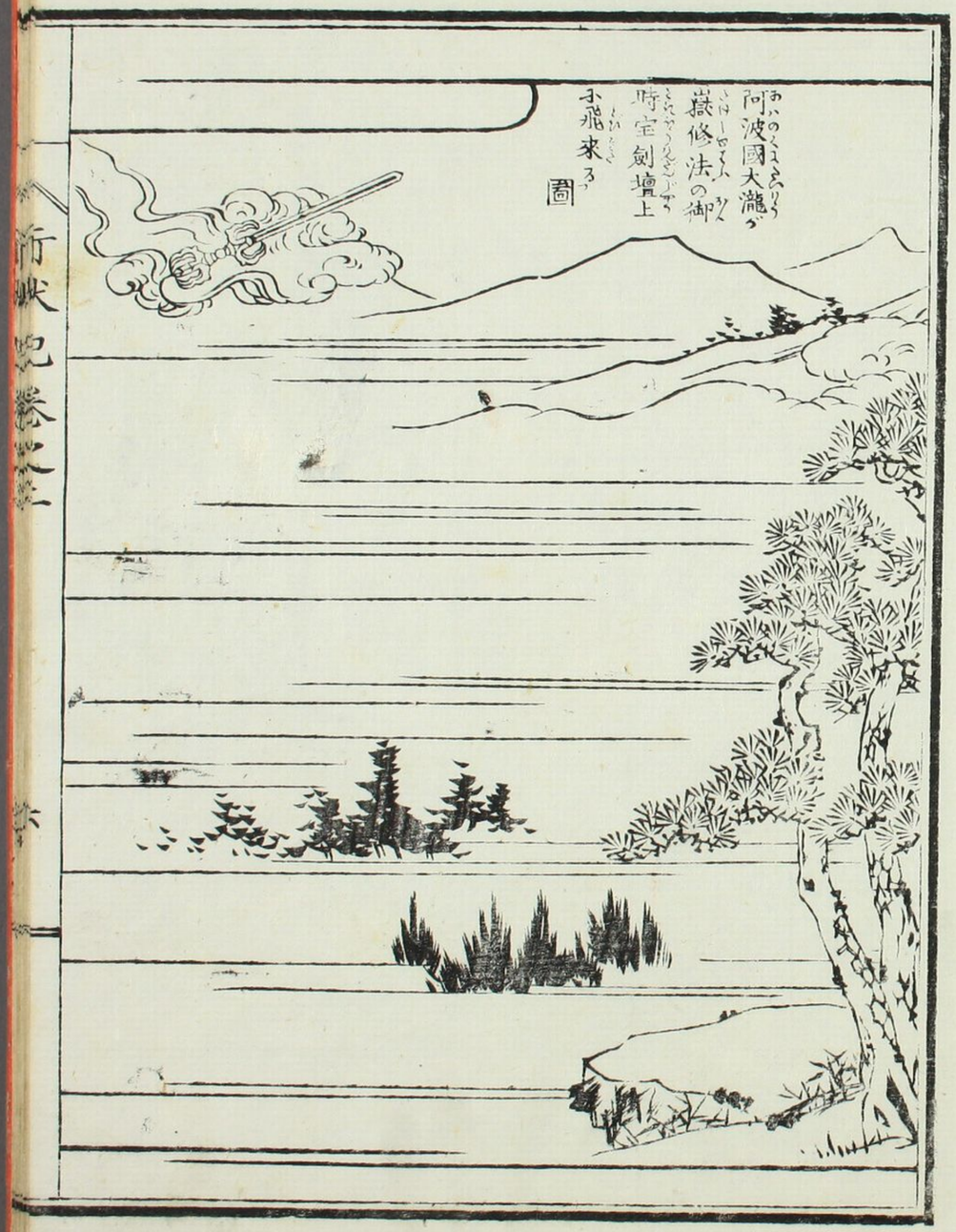






當時十師試卒して羯磨教授堂し比丘の具足戒を
受給ふ此時に御名試空海と改らるゝ志ろしめしより
ゝの戒珠試胸乃間ふかゝやゝし德籠を掌乃中
ゝ携ふ油絣まゝをつゝくぶゝを深囊惜てゝゝを
事なし大師御筆の牒書ゆいつゝて今ふいゝる
まで登壇受戒の模範と仰ゝる
大師弱冠の時のゝを驚塵試いとひく傍を落し緇
林ふまゝゝりて色試壞せゝゝりゝゝゝゝゝるへふ
人事となげゝもて世ゝ煩とゝゝれ考ふ逃閑をゝゝ
のとして寂黙試心ゝゝ給ふ山ゝゝ山ゝ入峯ゝゝ

聞持修行


阿波國大瀧ノ嶽修法の御時宝剣壇上ヨリ飛來る圖

土佐國室戸の
觀念の御時明
星を海中ゟ吐
の圖

峰にうつりて練行年をかさね薫修日とゝもに深暁
苔巌のさびしきをもとめては雲経行の跡をうづみ粒
蘿洞にうちすら那るに深くには風坐禅乃窓をとぶ
らふ煙霞をなめて飢をとゞむれば鳥獣も馴て友
とせり或は阿波乃大瀧の嶽にのぼり虚空蔵の法を
修行し給ひしに宝剣壇上に飛来て菩薩乃霊
応を顕はし　件の剣彼山の不動の霊崛にとゞまれり
或は土佐乃室戸崎にとゞまりて求聞持乃法を観
念ましに明星口の中に散じ入て仏力の奇異を
現ぜり則ち明星を海中にむかひて吐出し給ひ

しに其光水にしづまりて今にいたるまで闇夜に臨り
餘輝なほ粲然たり凡厳冬凍雲に寒気を厳乃
夜をさまて精を道にあらはし盛夏苦熱の暑き
日は穀漿を絶て懺悔の法を凝志ましますなり
朝暮におこたらで歳月を送り給ひ
室戸の崎は南海浜に見えわたりて高巌かさなり
みわだかまりて遠くは補陀落をのぞみ遥に鐵圍山
を限りとせり松を払ふ嵐は旅人の夢を
やぶり苔をつたふ谷の水は隠士の耳を洗ふ村烟
渺々として水雲茫々たり呉楚東南坼乾坤日夜浮

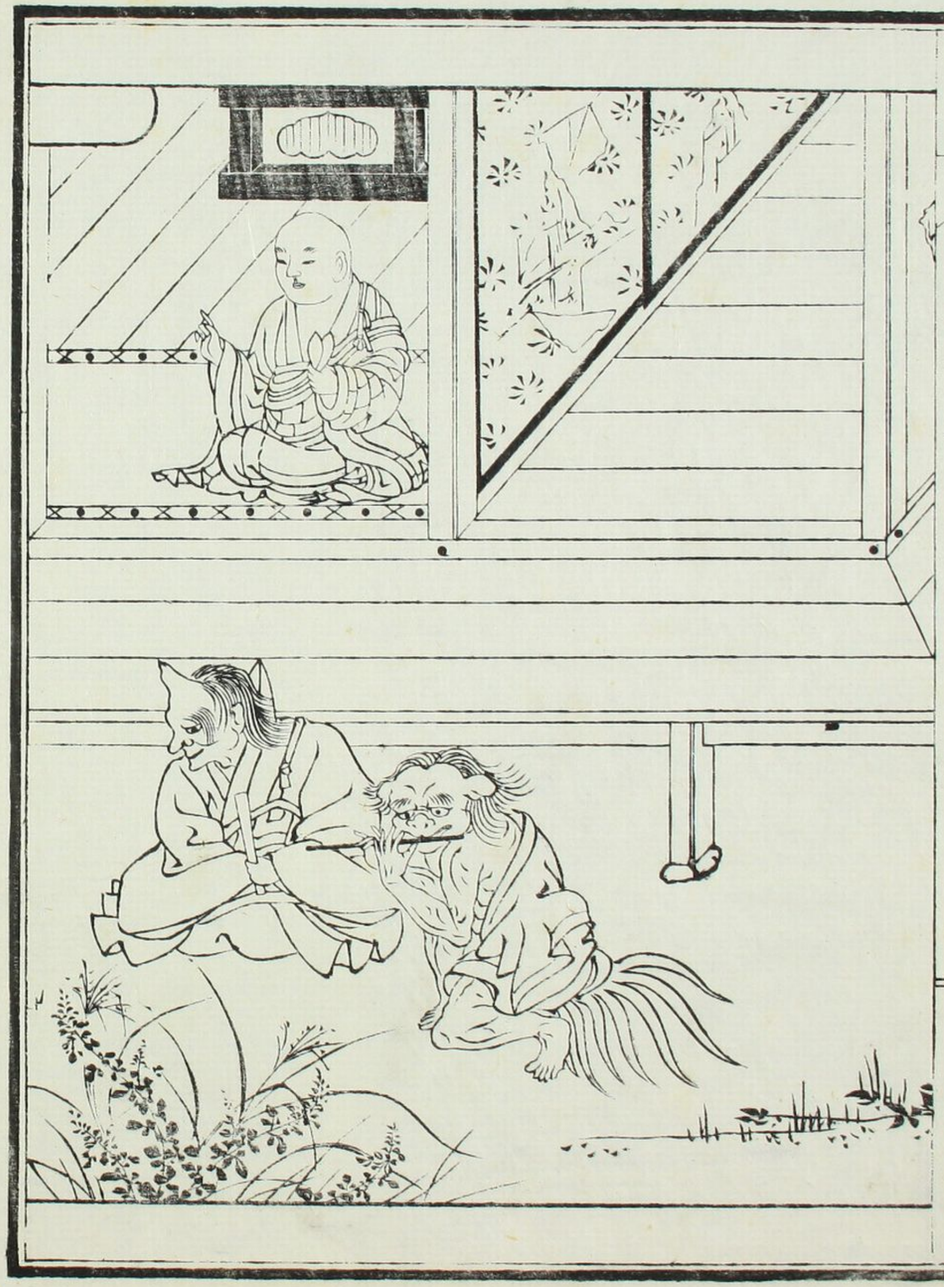
なるとの向もかゝる佳境あてやと思出られこゝろ
大師此所試歴覧し給ひ〜ふ修練お應の地形也
と思食てやゞて此所おこゞまりて仙居ゐど結び
く初ひ給しふ初ふ初く物こゝろあられあり
ゆきこ八我國お風とく三十一字とうく清事給ひ
あるとゝのや

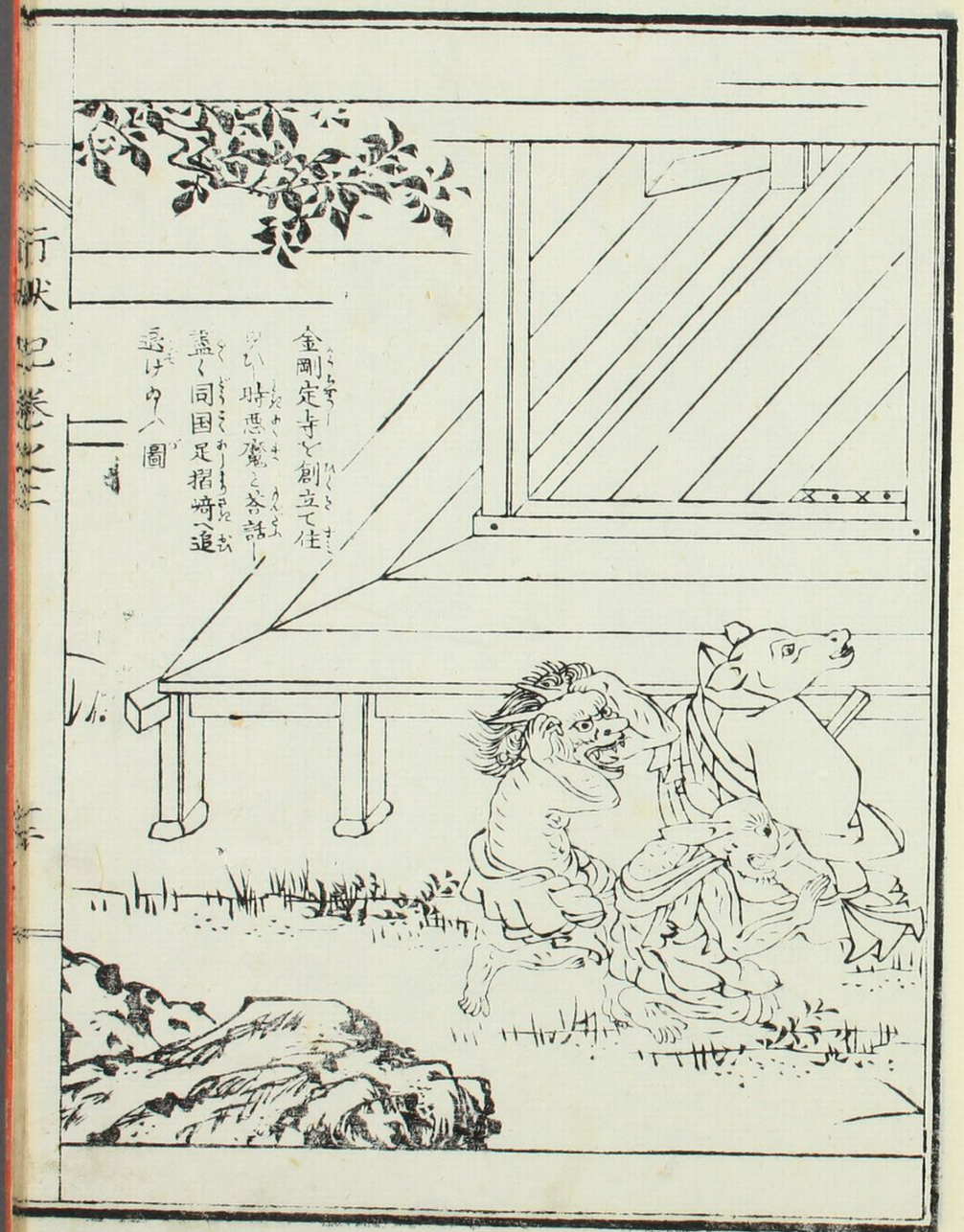
法性乃むろとゝきけどわづすめぞ
有ものかゝみうぜよ紛日で郵ぞ

亦秘法よの巻むぞに海中より毒誘出鬼し
夫類の形顕を素く行法を妨ゞとを大師被示試

室戸寺にて惡龍降伏の圖

退ん〻為ふ也ぢうり呪詛唱へ唾と吐出し
給ふ四方よりかく所に散じく衆星ゆ光ゆ射ゞ
如きかりしらバ毒龍悪類悉ふ退散せりもの
唾乃ふる所永く海渡ゆ泊石ふこびまんゝと
数光の珠乃ごとくして昏闇ゆ照もとる
宝戸ゆ湊のかくもに世有余町をけりて揺
地有り大師雲阿の仮ふつきて忡護ゆかまひ
と今常ふ代仏ゆ給ふ所寤願ゆ果
さむゞ為ふ一の伽藍と立ん額を金剛定と
名付給へりまの所ふ魔縁蟯ひ殺く種〻




金剛定寺を創立て住
時悪魔と咎話し
盡く同国足摺埼へ追
遣げゆ圖

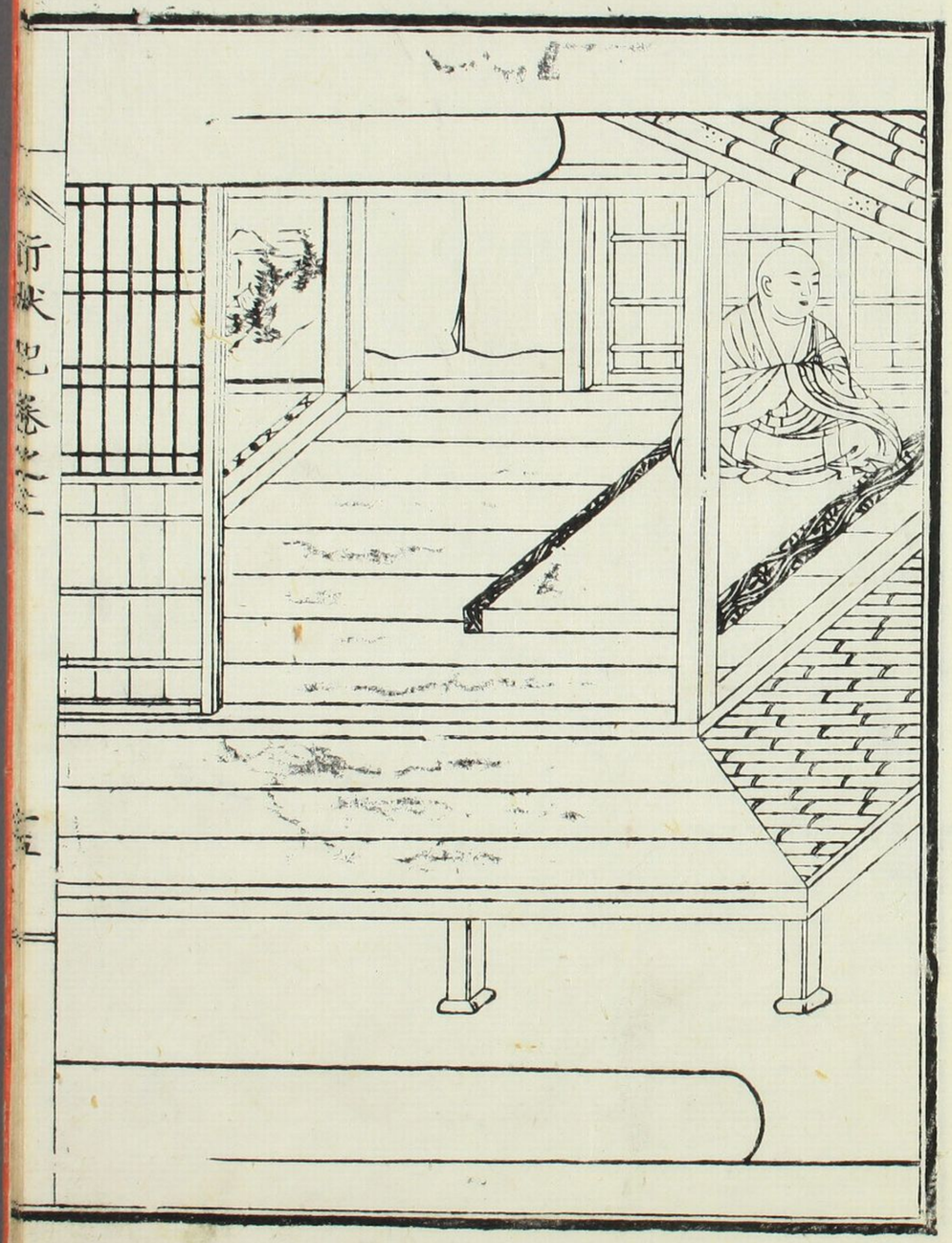
同所の捕ゑ
御真影を
彫刻悪魔
を壓鎮の
圖

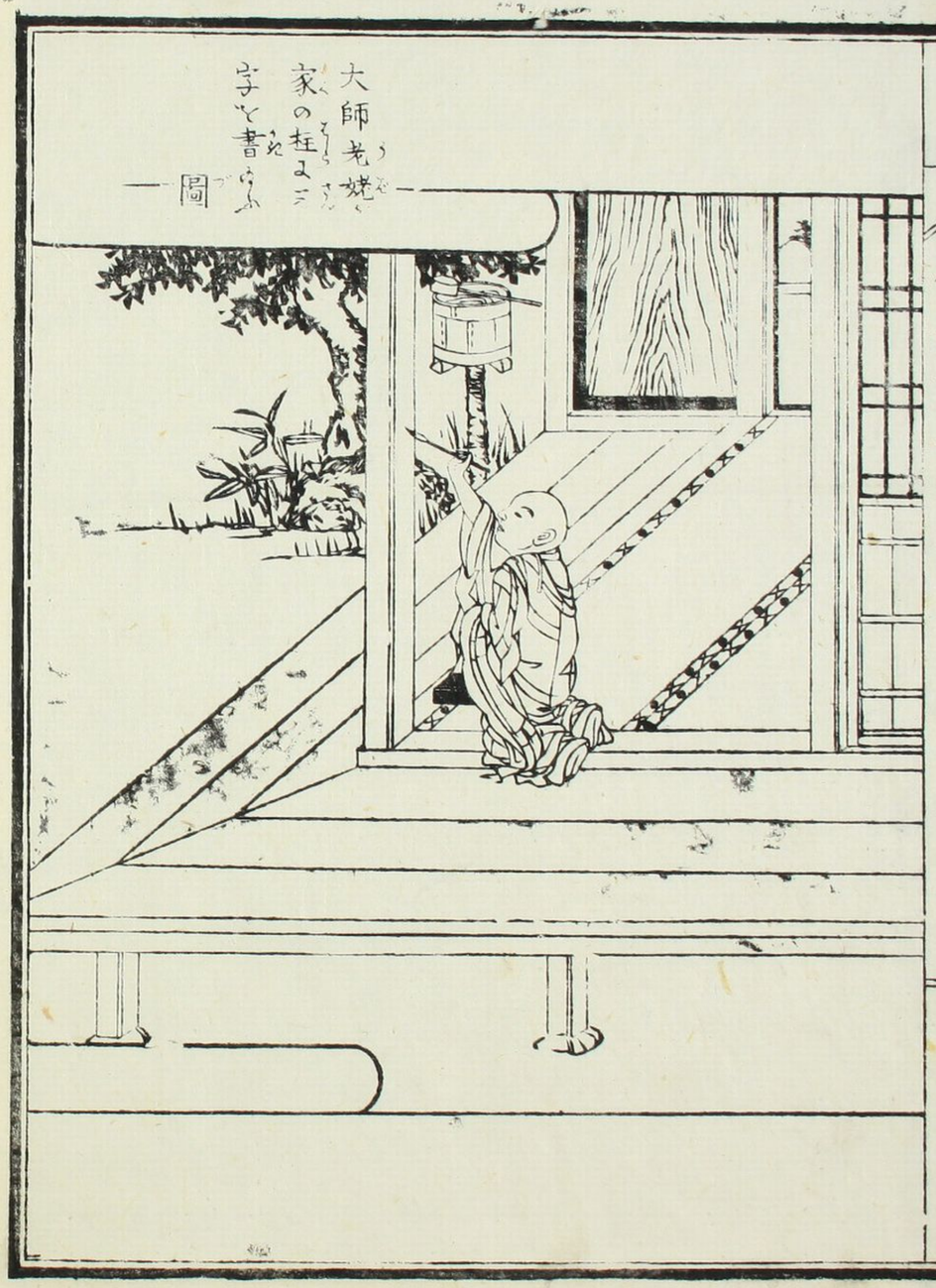
障碍をるしく々を大師則結界し給ひて悪魔
とさまゞ御同巻るり我宣ふ行ひむ時ゆ
汝ものの初よりもむべくを仰らまて大なる精
木の洞り出ものし給ひ給ひしかば後
永く魔類饒ふ事なるまれるより捕を狩さん
枝ものを繁茂して未の世までつきもりなる
悪魔を同国波多の郡芝摺の淵ふ追迫らま
しとり給へくり昔釈尊月氏の毒龍を降しめひ
玉彩を窟内ふうつしく隠顕の奇異を示し今
大師土州の悪魔伐ものり坐けて新像を樹下ふ彫

して古今より勝利をわどこと給へ共もむそこで佛陀の奇特をひやしまむ尤又祖師の威德成らつともむ爾さりよりをや

播磨國汾陽のわとりに隨順の大師修行の次ふ旅宿し給ひるに老嫗来て鐵鉢を假り設まく大師を供養し奉り則由緒成のべて中さく妻子とはまこと基薩の御事子より信者出家勢ざるし時の妻女なり彼信の遺言り我入滅の後来る日菩薩来る汝が宅ふ者し給へ爾しとのへり指とおりて日をかぞふるなり今日

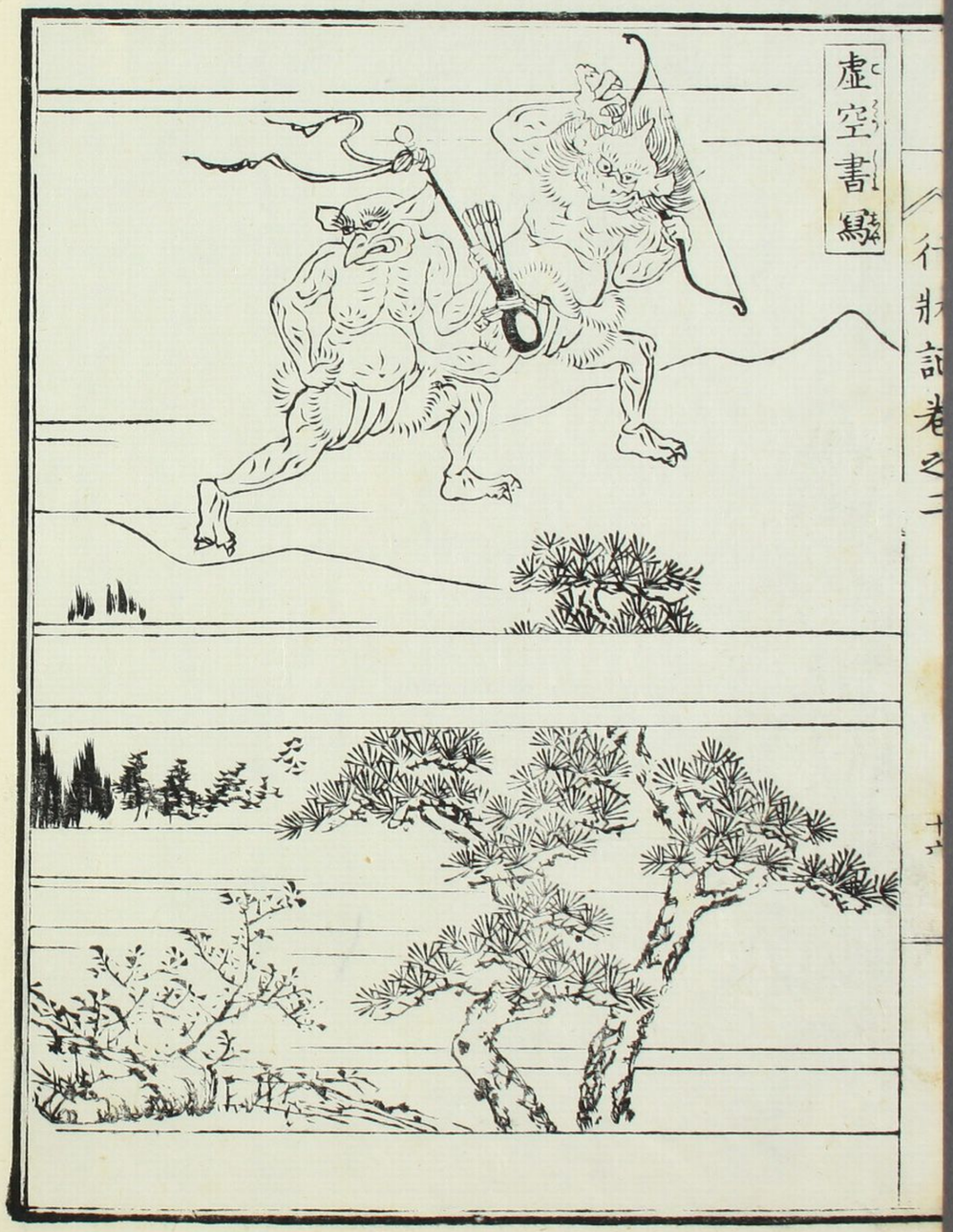
播磨國御修行の時
老婆大師を供養し
奉る

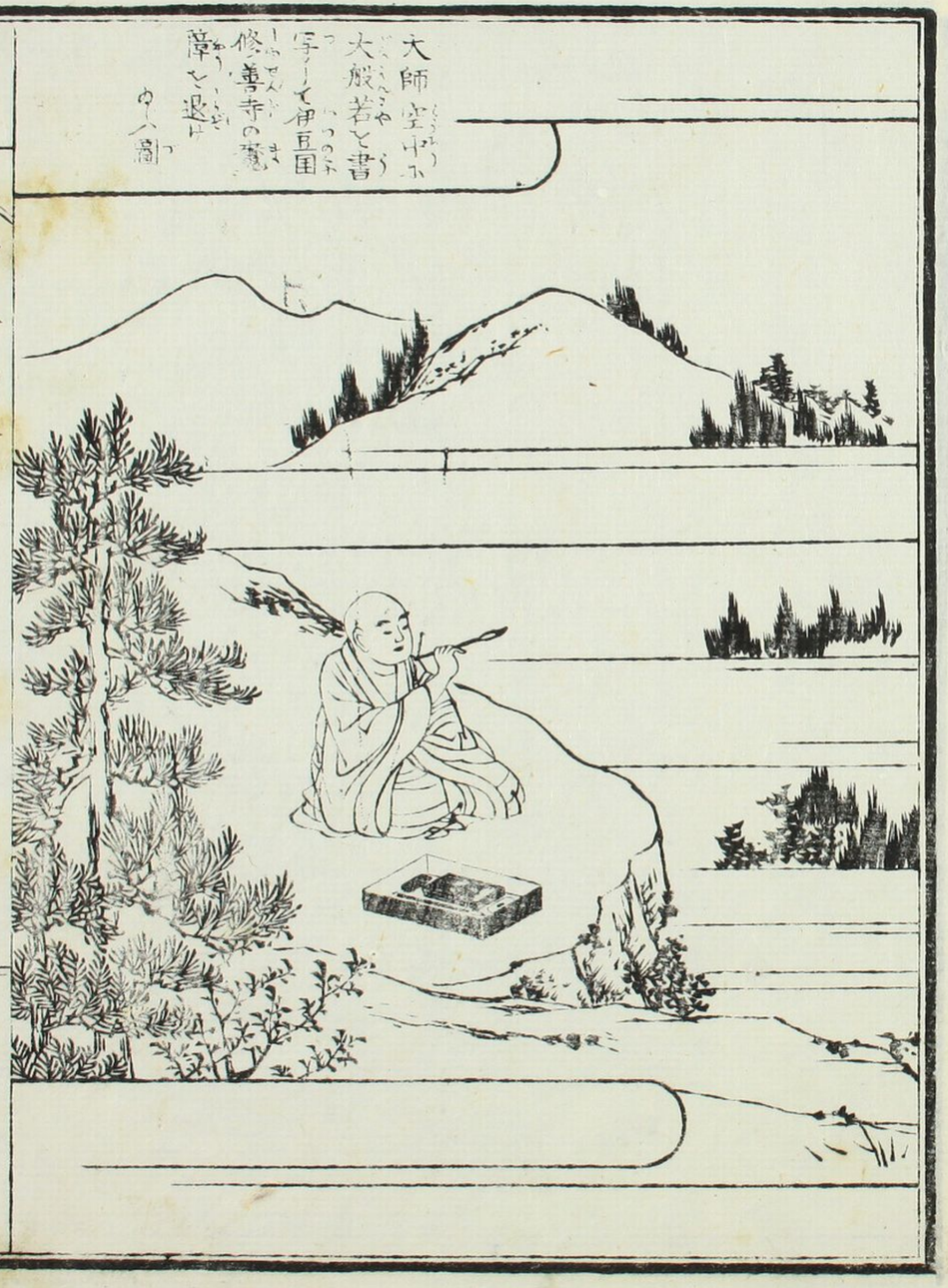




大師老婆家の柱よこ字と書ふ圖

まで不期ふしのさまりあいやしとしへども忽ち
菩薩ふ達まるまれ幸ふ表しきなり隨喜の
心を表して此絵はまるりとゆき大師此
いりを出ち給ふ老嫗ゞ為ふ天地合乃
三字を柱ふかき付給ひ久まバを字ふゝく深き
まれはゞゞふよなる存命を時氣疫病ふ拂ち
さまるものあふすゞく是はは香ふ病ゝもゞ消
除しゝりとるむ
伊豆玉桂谷の修禪寺ふ大師経行乃霊地果蹟
修練乃霊跡なり志ふ慶蹟のをゝり


虛空書鷂


大師空中ホ
大般若と書
字して伊豆国
修善寺の魔
障と退ぱ
ゆ人劉

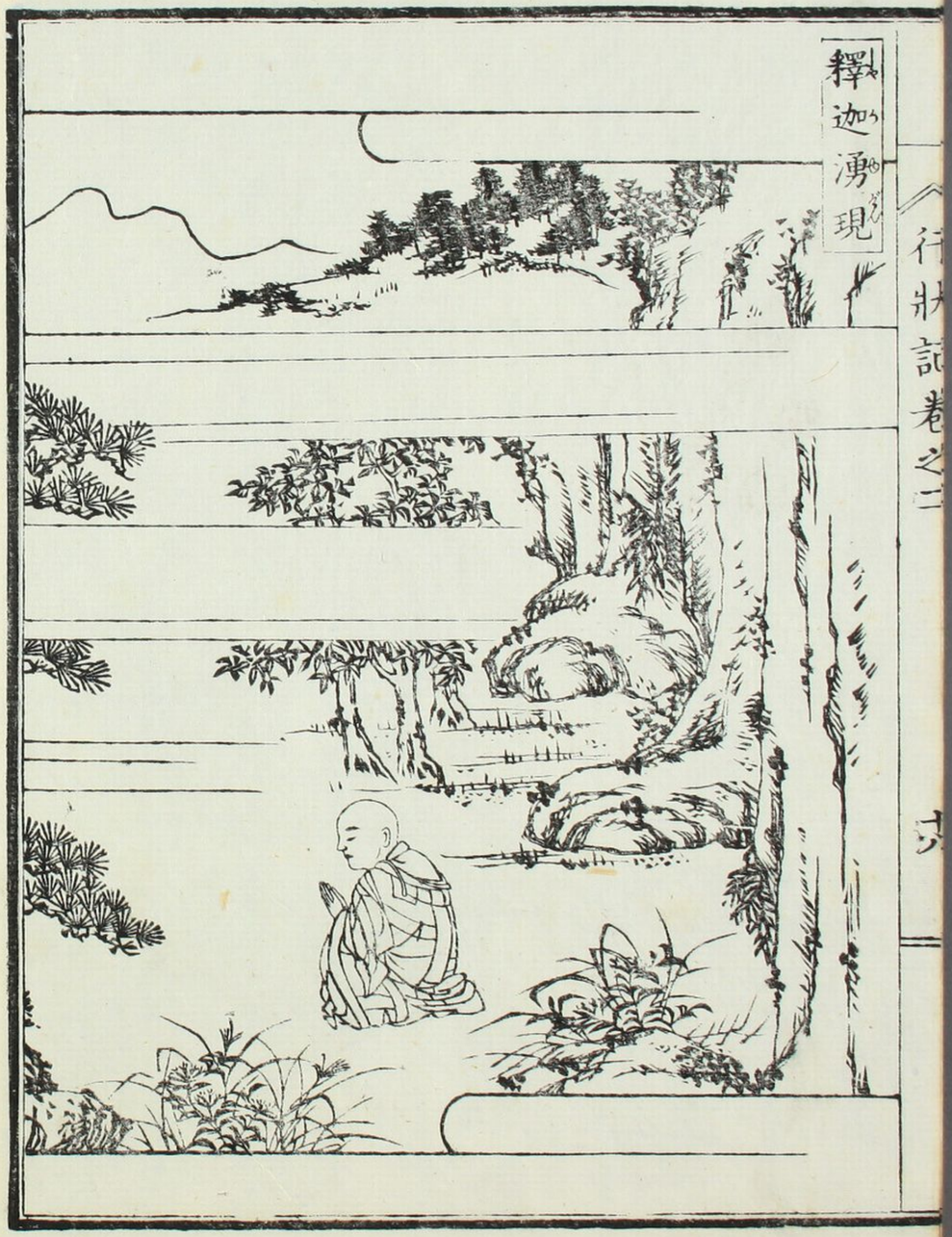
ゝれバ大師虛空ゝ向ひて大般若乃魔事品
ゝ説ゝ給ひ事ゝ不經乃文字忽ゝ顯現しく
六書八体ゝ點畫みゞくまざまなれを後ゝ魔縁
なゞを絶く佛法猶ゝ盛ゝまゝり大師此ゝ
ゝ海ゝ果蹟大徳と相共ゝ法ゝ給へる
ゝ像今ゝ世ゝ傳ゝ靈驗ゝ多ゝ
傳ゝ

大師誕生ゝ地讃岐の國廣風が浦ゝ岩木乃
姿も美ゝなゝ丹青ゝ彩ゝ廣風
と立ゝ不似ゝ廣風の浦と名ゞ事

なり大師まゝ不ゝくれゝ給ゝひしゝ
孤峯の上ゝ片雲ゝ中ゝ釋迦如來安禪ゝて
形ゝ現ゝ給ひき大師歡喜乃余ゝ
地の有様とゝ問ゝ給ゝ彼所ゝ
ゝ勢給ゝ後ゝ山ゝ我拜師山も
號ゝ又ゝ湧出の嶽ゝ凡佛徳
ゝ行ゝ神感ゝ應ぎゝ先天魔を降ゝ人民
ゝ毎ゝ事給ゝ古ゝ長ゝ乃松ゝも志げく
楚嶽の竹ゝ元ゝ多ゝ
筆畫ゝ

樓陳ゝ

釋迦湧現

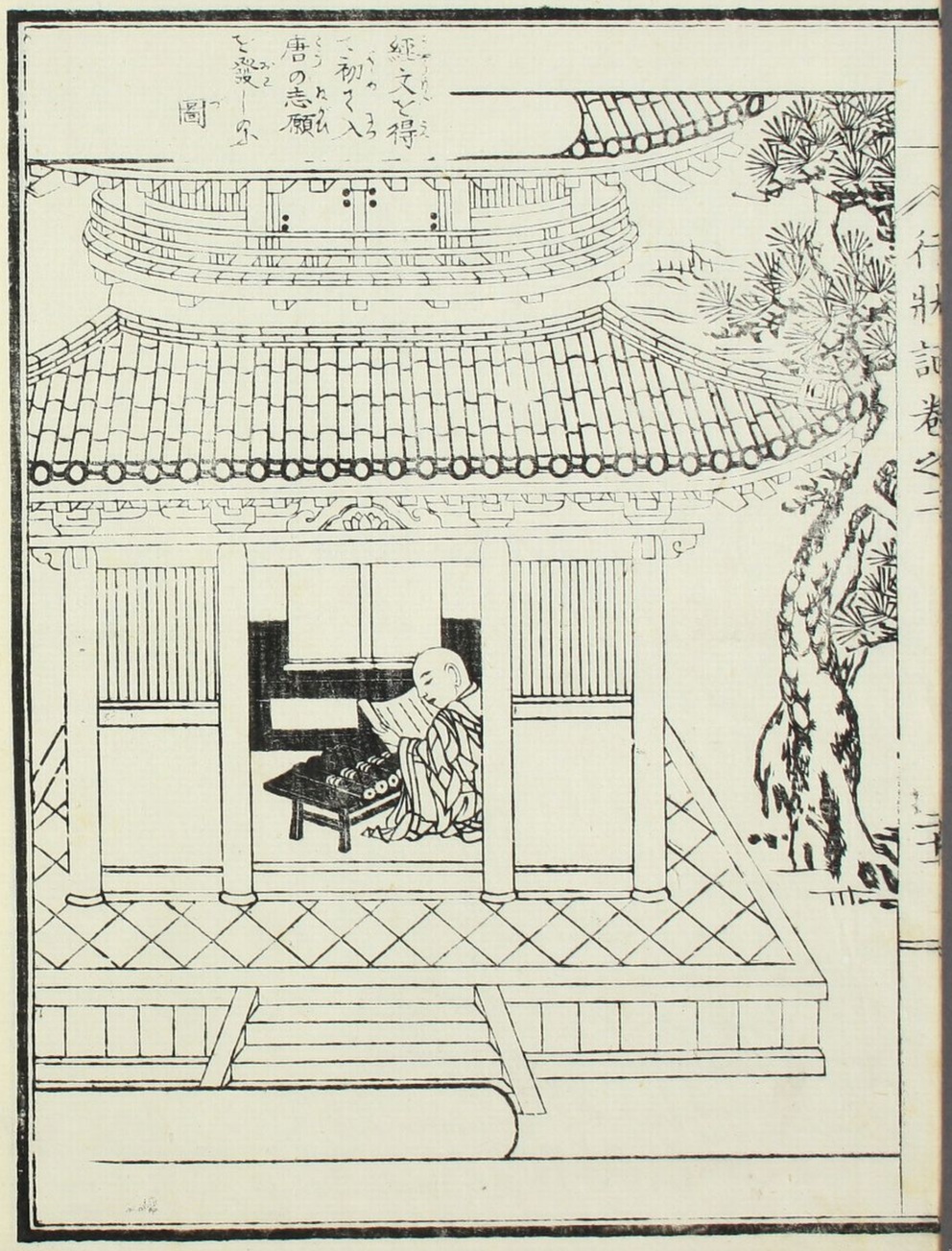


讃弘屍風浦
に釋尊を拜
し給ふ圖

大師進具の後あまねく諸宗の名德に尋ぬ
法海の要津をとゝ中ふも岩渕の猛浪正勤
大安寺吾儀大德の入室として久しく三論の奥
賾に極めまれ一部の群英に秀ぐる大師
童稚のはゝめるを席を避く旨をうけよと
亟く端を問給ふこと寸陰おろそかなる寢食
やすき事なし雪の樹提婆の遺教と結縁
しかのみならず毗曇成実の法相を研覈し給へり
ちゝ ゆのまども空論有宗の邪旨三論十玄乃
劫義なほうれ蜃樓幻化の形容ふして轉王

表実より宝所ふ給のらるゝ
佛祖ふ誓願をおこしてのゝまを我
仏法ふ志ゝぐひく常ふ要法を尊むる
三乘入乘十二部経仏神ふ疑ひ給りていまゝ
決まる事ゆゝ給ふ
諸佛我ふ示ふ二世ふ光し給へと一心ふ祈請
給ふ爰ふ中ふ人ありて告ていはく
経まし法を大毗盧遮那経なづゝ是則汝
のもとむる所なり大和の玉言市郡久米乃道
場ふ東塔の下ふ有と耶歓喜の心ひ給へ

久米感經
霊夢ふかうて大和国桑寺ふさうの人圖



波斯より尋ね伴ひ給ひ経巻のと発て一部織なとれ
守ふ疑ふべき人命ー是ふ有ふ独ふ　本朝ふしてとも
迷ふべき人命ー是ふ有ふ独ふ　本朝ふしてとも
御志をも第まし給ひき
此経らは波斯より持ち来る由来を尋ねむらし
中天竺は三蔵若元畏むせ給ふ密機の熟生と
ち泳ぎ不ず秘教の行義を知らむ為ふ一葉
乃舟を浮く万里ふ浪をわたるもるうに大唐
を辞して親ま　本朝ふ来給ひ時ふ市郎
王舎のほとりふ庵して一宇ふ寶龕を起立きり

今は東塔院にまうぶ学ちうふ大俗にて空有乳
蘇の法味はいかに好し別民いまだ秘密甘露乃妙菜
はいかにざりしにうりて三昧むかしを巨唐に
うちりぬふ三粒の佛舎利と寶塔の底より出ちあ
七軸の大日経はいかに利益の下より出ちあ記文はい
殘しくいまく弘覇をもあまを釈尊は遺教経をハ
ちうに遼那は金剛ありちうは河をどを小国所域
大機いまだ熟せざるふちうて仏法を仏地よりとぶあ
まをふ人をまち時を期するあり来業うり必
弘法利生の菩薩来りて世ふ知らむべしと記し

給ひく震旦国ふ渡り給ひうるるとるむ波寺乃
流起ふ見えうり

弘法大師行狀記卷之二終

行狀記卷之二

二十三終